

首都圏の中高生が考える「鹿屋市が抱える1000の課題」

―新しい形のシティセールスで知名度アップへ―



鹿屋市ふるさとPR課主任主事

● 橋口 和彦

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・定住・交流推進支援事業」として、地域団体もしくは市町村などが自主的・主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。

今回、平成28年度に同事業を活用した鹿児島県鹿屋市での取り組みを同市ふるさとPR課の橋口和彦氏にご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

事業のきつかけ

平成26年12月、政府はまち・ひと・しごと創生法に基づき「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定。これを受け鹿屋市では、平成27年10月に「鹿屋市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定しました。

本市は、鹿児島県東部の大隅半島の中央部に位置し、同半島の中心市として、現在約10万3千人の人口を有していますが、全国の他の自治体

と同様に人口減少に対する課題を抱えています。

総合戦略の中で本市は、2060年に9万人の人口を維持するという目標を掲げました。この目標を実現するために、未来につながる住みよいまちを目指すひとつの施策として、市内外に多くの応援団（ファン）をつくることとしています。

事業目的はシティセールス

首都圏の中高生が考える「鹿屋市

が抱える1000の課題」チャレンジ事業（通称「かのや1000チャレ」）は、総合戦略の策定に先立ち、平成27年7月に、首都圏で鹿屋市の知名度を上げる、鹿屋市のファンをつくることを目的に事業を開始しました。

都市部の催事で、法被を着て旗を振り懸命にPR活動をやるこれまでの手法とは違う切り口で、シティセールスに取り組む先駆的な事業として始まりました。

ターゲットは首都圏の私立中高生

本事業のターゲットは、首都圏在住の中高生。日本の教育の最先端を走る首都圏の私立中高を巻き込み、教育の新しいあり方として全国へ波及するのではないかと狙いが

ありました。

本事業は、100項目以上にも及ぶ鹿屋市が抱える課題（主要施策）を参加校へ提供し、実施策・解決策を提案してもらうという内容です。平成32年度に大学入試制度改革を控える教育現場と首都圏の中高生に地方が抱える生きた課題を提供することで、地方にもっと興味を持ってもらい、地方と首都圏との交流促進や交流人口の増加を目指す行政の狙いが一致した形となりました。

白熱する成果発表会

発表会の審査員を務めて最も驚かされるのは、これまで行ったこともない、聞いたこともない、ましてや「鹿屋」なんて読めなかったという生徒たちが、真剣に鹿屋市の情報を集め、独自の視点で深く研究しているということ。そんな彼らの研究成果を審査する立場として、私たちの発表に対する質問も自然と熱を帯びてきます。質問は会場にいる他の参加校や見学者からも出され、質疑応答はさながら意見を戦わせる市役所の会議室のような雰囲気になります。

発表会後には、参加校同士の交流会を開催しています。ここでは発表会の雰囲気とは打って変わって、和やかに「鹿屋市」という共通の話題

で意見を交換。「これまで他の学校との交流の機会がなかったので貴重な経験ができた」という感想が多く寄せられます。

平成28年度は地域活性化センターの助成金を活用し、7月開催の第2回発表会で優勝した本郷学園と、審査員特別賞を受賞した湘南学園の生徒たちを鹿屋市に招待しました。文献やインターネットでしか得られなかった情報に加え、各校が研究テーマに取り上げた課題の関係者や職員との意見交換会、独自に地域活性化に取り組む市立の鹿屋女子高生徒会との交流を通して、鹿屋市をもっと深く知ってもらう機会を作りました。宿泊は本市が教育旅行の受け入れで力を入れている農家民泊とし、農業体験もすることで本当の田舎暮



第3回成果発表会集合写真



審査の様子



意見交換会の様子

らしを体験してもらいました。

予期せぬ事業効果

冒頭に述べた目的で開始した本事業は、当初意図していた効果以上のものを生んでいます。

京華学園、湘南学園、逗子開成、世田谷学園、本郷学園の5校から始まった発表会は、第2回以降に文教大学付属、山手学院、早稲田高等学院が参加し、現在新たに1校が興味を持ってしていると聞いています。表彰を受けた学校のウェブサイトにそれぞれの取り組みが掲載され、本事業が広く知れ渡ってきているところです。

第2回発表会で実践力が評価され、審査員特別賞を受賞した湘南学園では、生徒たちの取り組みが学内でカフェテリアを運営するNPO法

人を動かし、実際に鹿屋の食材（カンパチ、紅はるか、深蒸し茶）を使ったメニューの提供を実現しました。また同学園から、生徒や保護者、地域住民が参加する講演会にお招きいただき、本事業の仕掛け人である副市長の福井逸人（当時）と、かのやオフィシャルリポーターの半田あかりが市の取り組みを紹介させていたなど、かのや100チャレから派生して対外的にPRする機会が劇的に増えています。

湘南学園では遂に、「かのや100チャレをやっているので受験したい！」という受験生まで生まれ、生徒募集広報にも一役買っています。

そして新たな展開へ

第3回発表会では、生徒たちの発表に加え、エキシビジョンで逗子開成の指導教諭が「教員版かのや100チャレ」と題し、教諭の立場で研究した内容を発表し、教諭自身の役割を入れた貴重な提案をいただきました。これは、

文部科学省が推進している地域と学校の連携・協働のためのコミュニティ・スクールの推進にも寄与するものと考えています。

第3回発表会を終え、生徒たちからは「次は鹿屋で発表会を開催してほしい」という声が多く挙がり、第3回の優勝校である逗子開成は、かのや100チャレに取り組みに当たって、今年の夏に本市を訪れることを予定しています。

とかく短期での事業効果が求められがちの行政の施策ですが、本事業の効果は彼らが進学し、社会に出た後に本当の効果が現れてくるのではないかと考えています。彼らの青春をかけたかのや100チャレが、彼らの人生の1ページに刻まれること、それが本当のファンづくりであり、鹿屋市が目指すシティセールスのひとつではないかと考えています。

かのや100チャレを全国へ
本事業は、地域活性化と次代を担う若者の育成を地域間連携で行える貴重な取り組みと考えています。「課題は宝だ！」を合言葉に、この取り組みが全国に広がり、人口減少を抱える地方の課題を解決するひとつの手法としてスタンダードになっていくことを切に願っています。